

「日本語研究」の授業評価

国語専修・佐藤栄作

1. 授業の概要

この科目は、カリキュラム上、日本語学の入門である「日本語概説」に続くものとして位置付けている。内容は、「研究」と称しているが、「日本語文法の入門」である。日本語学の領域すべてを半期で概説することは不可能であり、かつての「国文法」に当たるものとして、日本語文法に絞った科目を半期置くことは不自然ではないと考える。

現在、日本語関係の科目は、学校教育教員養成課程ならば、「日本語概説」「日本語研究」「日本語学特講」「日本語学演習」と4つしかなく、総合人間形成課程も、「日本語概説」「日本語研究」（ここまでは学校教育教員養成課程と同じ）「日本語と日本事情」「世界の日本語演習」の4つである。すなわち、「概説」→「研究」→「特講」→「演習」というカリキュラムであり、その2番目として、内容を日本語文法に特化した「研究」を置いているということである。「日本語概説」は必修であるが、「日本語研究」以降は必修ではない。3つめの「日本語学特講」と「日本語と日本事情」、4つめの「日本語学演習」と「世界の日本語演習」とは、内容が大きく異なるので、日本語に興味・関心を持った学生が、日本語学をより広く学べるように配慮している。半期科目4つだけでは、日本語学について充分ではないと思うが、文学部ではないので、取り上げる対象領域と、教育学部らしい内容の精選が求められるのも当然のことである。それゆえ、「入門であって研究でもある」科目になるよう努力する必要があると考えている。

本科目は必修ではないが、例年、国語専修、国際理解教育コースの学生の大半が受講している。

同じ科目名「日本語研究」であり、取り上げるのも「日本語文法」であるが、学校教育教員養成課程は「国語教員」、総合人間形成課程は「日本語教員」に関わる科目であると考え、本年度も、別々に開講した。

本年度の本講義の受講生は、学校教育教員養成課程の方は14名。総合人間形成課程の方は18名だった。内訳は、前者は、国語専修11名、その他の専修2名、留学生1名。後者は、国際理解教育コース14名、留学生3名、学校教育教員養成課程1名だった。前者の留学生は、法文学部所属の韓国人留学生で、後者を登録するよう勧めた

が、時間割の関係で前者を受講。後者の留学生の一人は、人間デザインコースの中国人留学生。他2名は、中国からの交換留学生である。また、後者の学校教育教員養成課程の学生は、日本語教師のプログラムの科目として「日本語研究」を位置づけているため、総合人間形成課程の方を登録したものと考えられる（3年生である）。

2. 授業の目的・到達目標

授業の目的、到達目標は以下の通り。

◇学校教育教員養成課程「日本語研究」

【目的】—中学校・高校の国語科教員として身につけておくべき日本語の概要を学んだ学生が、特に重要な分野について、深い知識を得、分析法・研究法を学ぶ。

【到達目標】

- (1) 日本語の文法に興味・関心を持ち、現代日本語文法で注目される事象、問題となるテーマを挙げるができる。
- (2) 国語科教育における文法と日本語教育における文法との相違点、それぞれの特色と問題点を説明できる。
- (3) 学校文法の特色を理解しつつ、国語科教育における文法の授業を担当できる。

【ディプロマ・ポリシー】

教科・教職に関する確かな知識と、得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

◆総合人間形成課程「日本語研究」

【目的】—国際交流に関わる仕事に従事する者、あるいは中学校・高校の国語科教員、外国人に対する日本語教師として（以下、同じ）

【到達目標】

- (1)(2) (同じ)
- (3) 現代日本語文法の基本事項について、日本語教育、国語科教育において授業を担当できる。

【ディプロマ・ポリシー】

21世紀の豊かな多文化社会を築くため、欧米・日本・中国の言語文化に関する深い理解を有し、得意とする分野の専門的知識を修得している。(知識・理解)

3. 授業評価法

授業評価は、最終回に実施した学生アンケート

による。アンケート項目は以下の通り（昨年度と同じ）。

- 1 最も印象に残ったこと
- 2 国語教師になって役立つこと
- 2 日本語教師になって役立つこと
- 3 取り上げてほしかったこと
- 4 改善点と改善策

4. 授業評価結果

アンケート回答者は9名と9名。留学生は提出していないので、以下すべて日本人学生。

- 1 最も印象に残ったこと（括弧内は昨年度）

◇学校教育教員養成課程では、

- 「学校文法の問題点」…………… 2名(3)
- 「活用表の違い」…………… 1名(3)
- 「ヨル・トル分析」…………… 7名(13)

今年度の方が学校文法と日本語教育の文法との違いを丁寧に話したのに、印象に残ったのは「ヨル・トル」だった。中学での文法の授業との違いを最も感じたのは、そこだったようだ。

◆総合人間形成課程では、

- 「学校文法の問題点」…………… 1名(2)
- 「は」と「が」…………… 1名(0)
- 「学校文法と日本語教育との違い」…………… 0名(3)
- 「ヨル・トル分析」…………… 5名(4)
- 「日本語の複雑さ」…………… 1名(0)

- 2 教師になって役立つこと

◇国語教師（学校教育）では、

- 「学校文法の問題点など」…………… 3名(10)
- 「学校文法授業の留意点」…………… 4名
- 「教科書の限界」…………… 0名(2)
- 「動詞の活用、活用形」…………… 0名(2)
- 「方言の尊重」…………… 1名(0)

学校文法の問題点を丁寧に話したことが、単なる問題点から、授業の留意点へと変わったのなら、評価できる。

◆日本語教師（総合人間形成）では、

- 「文法の教授法」…………… 1名(0)
- 「学校文法の功罪、役に立たないこと」…………… 2名(2)
- 「学校文法と日本語教育との違い」…………… 1名(3)
- 「活用と活用形」…………… 1名(2)
- 「動詞の分類、外国語との比較」…………… 0名(2)
- 「助詞」…………… 1名(0)
- 「テンス・アスペクト」…………… 1名(0)

学校文法との違いに時間を書けたつもりだが、そのまま「違い」を挙げた数は減った。しかし、「教授法」につながるとすれば悪くない。外国語との比較は、昨年度より低調だったと思う。

- 3 取り上げてほしかったこと

◇学校教育の方では、文法以外のことを記入した者が多かった。「敬語」が2名。「歴史や方言」「言葉遣い」「語彙」。「語彙」は「日本語学特講」で、「日本語史」は「日本語学演習」で取り上げるが、「敬語」「方言」は、かつてのようにまとまって扱う予定はない。しかし、こうした興味の芽を摘んでしまわないよう、次年度以降、講義内容の精選について再吟味したい。

◆総合人間形成の方は、記入者が少なかった。「方言」は「ヨル・トル」から興味が広がったものであろう。「日本語と日本事情」で対応したい。

- 4 改善点・改善策

本年度は、例年に増して記入が少なかった。これは、受講生が改善点を見出せなかったというよりは、この評価アンケートを軽く考えているからではないか。もっといえば、授業そのものが盛り上がり欠けていたことによるのではないかと考える。しっかりと学ばなかったから、もっとこうできたのという思いが生じなかったのだろう。

◇学校教育の方は、「もう少し資料がほしかった」とある。どこで不足だったのか、振り返りながら考えてみたい。◆総合人間形成では、「もっと学生のグループ活動を」。その通りだと思うので、次年度はそうように改善したい。

5. まとめ

本年度も、「日本語研究」を二つ開講した。しかし、昨年度の反省を生かせず、両者の内容はそれほど変わらないものしかできなかった。

学校文法と日本語教育の文法との違いを、本年度は丁寧に言ったが、それについての反応の差が、改善のヒントになりそうだ。学校教育教員養成課程の方は、学校文法の問題点を、国語教師として知っておくべき留意事項ととらえようとしてくれており、ここを次年度はしっかり意識的に取り入れていきたい。総合人間形成課程の方でも、日本語教授法につながると書いてくれた回答があった。学校文法からの脱却の利用である。ただ、そもそも中学での学校文法をほとんど失念している者もあり、そこへの対策を考えておく必要がある。

西日本方言のアスペクト（ヨル・トル）のインパクトは大きい。ここで方言への興味が高まるので、カリキュラムの全体構想に反映させていきたい。国語教師の場合、国語科における方言の扱いは小さいが、日本語への理解としてももう少し時間をとるようにしたい。日本語教育における方言の重みはさらに小さいが、「日本事情」に関する授業でもっと取り上げてみたい。そうしたことが結果としてDPにつながると信じている。